

# デカルトの哲学原理における 幼少期の先入観と偏見について

土屋 靖明（長野救命医療専門学校・非常勤）

## 序

デカルト(René Descartes,1596-1650)の『哲学原理』(*Principorum Philosophiae*,1644)はラテン語で刊行され、デカルトの友人であり、ルーブル修道院長をしていたピコ師(l'Abbé Claude Picot,?-1688)によって、フランス語訳が出版された(*Les principes de la philosophie*,1647)。デカルトの最重要文献ともされる『方法序説(理性を正しく導き、諸学において真理を求めるための方法の序説、更にはこの方法の試みなる屈折光学、気象学および幾何学)』(*Discours de la méthode pour bien conduire sa raison et chercher la vérité dans les sciences,plus la dioptrique,les météores et la géométrie,qui sont des essais de cette méthode*,1637)は、伝記的性格も小さくはないようにも思われるが、『哲学原理』はデカルトの哲学的思索の数々が、整列された文献と言えるであろう。

日本の歴代の、教育哲学、西洋教育思想史の研究者は、デカルトをどう捉えていたのであろうか。細谷恒夫(1904-1970)の『教育の哲学-人間形成の基礎理論-』(1962年)では、デカルトに関しては言及されていない<sup>1</sup>。

森昭(1915-1976)は、『教育人間学-人間生成としての教育』(1977年)の〈社会学主義による教育科学〉の項で、「デュルケムは、デカルト以来の主知的合理論の伝統にたち、またコント以来の実証主義の立場から、社会の独自なる実在性 *réalité sui generis* を認識しようとする社会学主義を体系づけたといえる」と<sup>2</sup>、デュルケム(Émile Durkheim,1858-1917)に代表される社会学主義の教育科学について、コント(Isidore Auguste Marie François Xavier Comte,1798-1857)の実証主義(positivisme)はもとより、デカルト以来の主知主義、合理主義もまた、その根幹にあると考えている。デカルトを主知主義、合理主義とする認識は、極めてオーソドックスで基本的なものでもあろう。

森はまた、「教育実践学への人間学的展望」という節の「問題解決と学習過

---

<sup>1</sup> 細谷恒夫『教育の哲学-人間形成の基礎理論-』、創文社、1962年。

<sup>2</sup> 森昭『教育人間学-人間生成としての教育(上)』(森昭著作集第四巻)、黎明書房、1978年、72-73頁。

程」との項において、「アリストテレスがとくに注目した〈驚き〉、デカルトによって典型的に代表されている〈疑い〉、ヤスペルスがストア派の思索の動機として指摘した〈迷い〉…。いくぶん割り切っていえば、〈驚き〉は主体を愛知(フィロソフィア)一般へ動機づける。今日では、驚きによって、人々は知的、科学的な探究へすすんでゆく。疑いも、知的生活において体験される時、多分に驚きの体験と似ており、したがって事実の科学的探究を動機づけるであろう。一般に驚きが奇異なる事象との偶然な遭遇にさいして起るのに対して、〈疑い〉はむしろ、社会的に通用し或は個人の所有している知識ないし信念について持たれる。驚いた主体は、自分に関心をむけるよりも、むしろ客観的な事実に関心をむけ、存在の認識 *Seinserkennis* へすすんでゆく。これに対して、疑う主体は、既存の或は既有的知識・信念といっしょに、それを正しいと思っていた自分までも問題にする。驚きも疑いも、確かなものの探求へ人を向かわせるのであるが、驚きは存在的に確かなもの(確実性)の探求を動機づけるのに対して、主体までも問題にする疑いは、むしろ、自覚的に確かなもの〈確実性〉の探求へすすんでゆく」と<sup>3</sup>、アリストテレス(Aristotelēs,384-322.BC)の〈驚き〉、ヤスパース(Karl Theodor Jaspers,1883-1969)の〈迷い〉と同じく、デカルトの〈疑い〉もまた、知的生活、科学的探究の学習過程において、生産的な問題解決の動機と為り得るものと述べている。デカルトの〈疑い〉に対する着眼もまた、極めてシンプルで基礎的なものと言えるであろう。

『哲学原理』第一部「人間認識の諸原理について」(Des principes de la connaissance humaine)の終盤部の題目について、第71節は「我々の誤謬の初歩的かつ主要な原因は、我々の幼少期の先入観にある」(Que la première et principale cause de nos erreurs sont les préjugés de notre enfance)、第72節は「(我々の誤謬の)もう一つの原因は、我々が先入観を忘れ得ないことである」(Que la seconde est que nous ne pouvons oublier ces préjugés)というものである。このような〈幼少期の先入観〉に関するデカルトの問いは、第一部最終節の第76節まで継続されていて、そうした〈幼少期の先入観〉が成年の後に至るまでも、我々の認識に誤謬を齎していることが少なくはないというのである。すなわち、デカルトは、〈幼少期の先入観〉というものを、ネガティブなもの、負のものとして考えていたのである。

従って、本稿では、デカルトに基いて、そうした負のものである〈幼少期

---

<sup>3</sup> 森昭『教育人間学-人間生成としての教育(下)』(森昭著作集第五巻)、黎明書房、1978年、802-803頁。

の先入観)、或いは幼少期の偏見というものが如何にして発生し、如何なるものであって、後々に至るまで如何なる影響を及ぼし得るのかという事柄について、検討して行きたい。

## デカルトにおける幼少期の先入観と偏見に関する考察-理智性の発達 の不充分さと感覚と感情の支配性-

第一部の冒頭第1節「真理を探究する必要ためには、生涯に一度は全ての事柄について、可能な限り懐疑をする必要がある」(Que pour examiner la vérité il est besoin,une fois en sa vie,de mettre toutes choses en doute autant qu'il se peut)の記述は、次のものである。

「我々は幼年(enfant avant que d'être hommes)の時、自分の理性(raison)を全面的に用いることなく、我々の感覚(sens)に現前とする事柄について、或る時は正しくまた或る時は間違って(tantôt bien et tantôt mal)判断していたので、様々な拙速な判断(jugements précipités)によって、真理の認識への到達を妨げられている。そうしたことから解放されるためには、極く僅かでも不確実さの嫌疑(moins soupçon d'incertitude)が見受けられる全ての事柄について、生涯に一度は懐疑を試みる以外はないように思われる。」<sup>4</sup>

本節には、デカルトの思想哲学の真髓と、本稿で取り扱おうとする教育的な問題意識が凝縮されていると言えるであろう。

我々は幼年時代、理性を正しく行使することができないので、万象を感覚的に判断してしまうというのである。感覚による判断は、或る時は正しく、また或る時は誤っていたりもする。そのことは、ソフィストのプロタゴラス(Protagoras,490?-420?.BC)の〈人間は万物の尺度である〉という考え方も、ソクラテス(Sōkratēs,469?-399.BC)によって、あるものが大きくもあれば小さくもあるという、感覚主義であるとする批判とも同様に考えられるのではないだろうか。デカルトにおいても、感覚主義は、幼児的であり、後節においては、原始的でもあると批判されることになる。すなわち、デカルトにおいては、ガッサンディ(Pierre Gassendi,1592-1655)の〈我歩く、故に我在り〉(Je marche,donc je suis)を身体論であるとして唯心論(spiritualisme)の見地から却下したことと同じく、〈我感ずる、故に我在り〉(Sentiō,ergo sum.Je sens ,donc je suis)もまた、感覚主義であるとして、思惟主義の立場から斥けられるのである。

幼少期の〈拙速な判断〉とは、〈先入観〉または〈偏見〉と換言できもしよ

---

<sup>4</sup> *Les principes de la philosophie*, p.13. 桂訳、35頁参照。

う。そうした拙速判断、すなわち先入観や偏見から覚醒されて、真理の認識に至るためには、万象を懐疑する必要があるというのである。デカルト哲学の基本でもある方法的懐疑の要点も、本節において要約されているのである。

そして、第71節「我々の誤謬の初歩的かつ主要な原因は、我々の幼少期の先入観にある」の内容は、次のようなものである。

「そしてここに、我々のあらゆる誤謬(*erreurs*)を認めることができる。すなわち、幼年期(*premières années de notre vie*)には、我々の心(*âme*)は身体と密に結合していたので、或る刺激(*impression*)の原因となるもの以外を受け入れる余地がなく、そうした刺激を自分の外にある何ものかに帰することもなく、身体を傷付けられれば苦痛を感じ、有益の場合には快を感じるに過ぎない。そして、刺激があまりにも軽やかで、身体の保持の重要であるところの利害いずれも感じることがないならば、我々の心は、まさしく我々の思惟(*pensée*)の外に存在するものを表現しはしない諸感覚、すなわち身体のあらゆる箇所から、心が密に結合している脳の箇所を経過する運動において遭遇する差異に応じて多様であるところの、味、香り、音、熱、寒、光、色、その他の、諸感覚(*sentiments*)を持つのである。同様に、こうした差異にはまだ気付かれてはいないけれども、大きさ、形、運動を感覚としてではなく、自己の外に存在するように思われる、もしくは少なくとも存在し得るであろうところの或る事物、ないしは事物の特性として見做されるものと知覚した。…空気は風、熱、寒が作用しない限り、無(*rien*)以外のなものでもないと考えられた。また、星(*étoiles*)はキャンドルの灯が放つ光以上に光り輝いているようには感じられなかったので、星々を燃え盛るキャンドルの炎より大きくは想像しなかったのである。また地球(*terre*)が車軸によって回転し、その表面が球状であるとは考えなかったので、まずもって地球が不動(*immobile*)であって、その表面が平坦(*plate*)であると判断したのである。そして、我々はこの方途によって、数多のこうした先入観によって飽和させられてきているので、我々は自己の理性を正しく行使することが出来るとしても、そうした先入観を信用してしまうのである。こうした判断は我々が正しく行うことができなかつた時に為されたものであるということを、従ってそれらが真というよりもむしろ偽(*faux*)であるということを考えたりせずに、我々は感覚の介在によって異なった認識(*connaissance distinct*)を持ったり、共通の認識(*notions communes*)もまた疑い得ないものであるにもかかわらず、我々はこれら先入観も同じように認めてしまうのである。」<sup>5</sup>

デカルトはまずもって、幼年期の我々を、心身が合一したものであると考えた。換言すれば、幼少期においては、身体に実在性を見ている、すなわち人を心ではなく、身体でもって見ているのである。幼少期には、思惟(*pensée*)はまだまだ充分ではないので、感覚(*sentiments, sens*)による知覚認識を真なる

---

<sup>5</sup> *Ibid*, pp.30-31. 同上、86-88 頁参照。

ものともしてしまったりもするのである。

また、原始古代においては、科学も黎明期であったため、素朴な感覚による認識を真なりともしてしまったりもしたのである。空気を無であると考えたり、星をキャンドルよりも小なるものと見做してしまったり、地球を球形とは考えられず、地球は不動かつ平坦であると、〈天動説〉を採ってしまったりもしたのであった。

成年となった我々は理性(raison)を正しく行使することはできるのではあるが、科学的発展がまだ十全とは言えなかった時代などは、〈感覚〉の判断によって獲得してしまった先入観を、偽りであるとは考えられず、疑い得ないものとしてしまったりもしたのである。

第72節「(我々の誤謬の)もう一つの原因は、我々が先入観を忘れ得ないことである」の内容は、次のようなものである。

「ついに、我々が理性を十全に行使できるようになり、我々の心がもはや身体に従属することもなく、物事を正しく判断しようと、または物事の本性(nature)を認識しようと努めるようになり、我々が子ども(enfants)であった時にしたところの判断の多くが誤謬に満ちていたことに気付いたとしても、我々はまたそれらから完全に解放されるとは言い難い。確かであることは、もしそれらが疑わしいという記憶(souvenir)を欠くとしたならば、我々は常に誤った偏見(fausse prévention)に陥る危険にあるのである。幼少期以来、我々は星を極めて小さいものと想像してきたので、天文学的道理(raisons de l'astronomie)によって、星々がこの上なく巨大であることを認識しているとしても、先入的な見解(opinion déjà reçue)はとても効力(pouvoir)を有しているので、我々はこうした想像からは未だになお解放されないことを思い知らされるのである。」<sup>6</sup>

我々は成年に達して理性が十全に行使できるようになり、心が身体から分離し、事象を正しく判断し、その本質を見極めようとする。そして、我々は幼少期にしたところの判断の多くが誤謬に満ちていたことを認識したとしても、常に誤った偏見に陥ってしまう懸念もあるというのである。天文学的道理、科学的道理、学問的道理から、理知的に星々が計り知れない程に巨大であると頭では分かっているとしても、デカルトの時代は近代科学の黎明期でもあるので、太古以来の星々を極小とする見方からは、なかなか解脱でき得ないのである。こうした科学的知見に限らず、我々が幼少期から素朴な感覚によって、心に刷り込まれたものから抜け切ることの困難さについて言及した節とも言ってよいのではなかろうか。

---

<sup>6</sup> *Ibid.*, p.31. 同上、88-89 頁参照。

第73節「第三には、我々の精神が疲弊するのは、我々が判断を下すあらゆる事柄に注意するようになる時のことである」(La troisième, que notre esprit se fatigue quand il se rend attentif à toutes les choses dont nous jugeons)には、次のような記述がある。

「加えて、我々の心は、苦痛や疲労を伴うことなく、同じ事柄に長時間注視を向けて考えることは出来ず、ましてや感覚や想像に現前とはされない、純粹に知的事柄(choses purement intelligibles)に注目することはより一層困難としている。心が身体と結合しているため、心がそのようになったのが自然であるにせよ、または幼年時代、我々は感じることに想像することにたいそう習慣付けられていたので、その種のことを考えることにより大きな容易さを身に付けるにしても、そこから結論付けられることは、多くの人たちは、実体(substance)を想像的、身体的、感覚的にしか思い描けないということなのである。…そして、我々にその本性を発見させるのは、我々の感覚ではなく、ただ理性がここに介入する時だけなので、正しき導きに努める人が極めて少ないことを鑑みても、大多数の人たちがたいそう混乱した認識しか持たないということに怪しんではならない。」<sup>7</sup>

同じ事柄に集中力を持続させることは、我々の精神に多大な労苦を要することとなる。ましてや、感覚や想像とは異なり、純粹に知的事柄への注視の継続は、なおのこと尋常ならぬ労苦を要することでもある。幼年時代は感覚と想像とを専らにしているのだから、事象というものを感覚的、想像的にしか素描できなかつたりもする。知性が十全に行使され得ていない状態は、然りでもある。事象の本質を発見させるのは、感覚ではなく、理性であるという考え方も、ソクラテス、プラトン(Platō, 427-347.BC)に始まり、中世スコラ哲学をも貫いて、デカルトにまで継承されたものでもあろう。しかしながら、正しき導きに努める人は極少数であり、良識(bon sens)は万人が持ちながらも、良識に導かれる人は多数とは言えないのではとの見解も、ソクラテス、プラトン以来のものでもあろう。喩えるならば、理性を有しながらも、欲望の誘惑に負けてしまう、天使の光を垣間見ながらも、悪魔の魅惑に心が虜となってしまうということでもないだろうか。いずれにしても、聖書以来の宗教的な課題ともなるであろうが、大多数の人が心が掻き乱される状態に陥ってしまうことを怪しんだり、訝しんだりしてはならない、責めたり咎めたりしてはならない、無理もないことと寛容する必要もあるということになるのであろう。

第75節「正しく哲学するために守られるべきことの要約」(Abrégé de tout ce

---

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.31. 同上、89-90頁参照。

qu'on doit observer pour bien philosopher)には、次のような記述がある。

「それ故に、もし我々が哲学の研究と認識可能な一切の真理の探究に真摯に勤しむならば、我々はまずもって先入観から解放され、我々がかつては信頼し、受け入れていたあらゆる見解(*opinions*)を拒絶して、それらを再び吟味することにする。…こうすることで、我々はまず始めに、我々是我々の本性が思惟するものである限りにおいて存在し(*nous sommes, en tant que notre nature est de penser*)、我々が依存するのは神(*Dieu*)であるということを認識するであろう。そして、神はその原因(*cause*)であるので、我々が神及び我々の思惟に対して有する観念(*notion*)に加えて、我々の内に、無は何ものの創造者では有り得ない(*le néant ne peut être l'auteur de quoi soit*)などの如く、永遠真理(*perpétuellement vraies*)であるところの数多の命題の知識(*connaissance de beaucoup de proposition*)を発見するであろう。…」<sup>8</sup>

〈我々は、我々の本性が思惟するものである限りにおいて存在する〉との文言は、『方法序説』第四部第一段落に登場する、「我思う、故に我在り(*Je pense, donc je suis*)*cogito, ergo sum*」と同じく、デカルト哲学の最重要テーゼであり、思惟する存在としての我の原因であるところの〈神の存在証明〉は、『省察』(*Meditationes de prima philosophia*, 1641)における中心課題でもある。古代哲学が対象に主眼を置いた存在論と言うべきものであるならば、デカルト哲学が心や精神に主点を置く認識論と言われる所以がここにあるのではなからうか。

我々が哲学に身を投じ、真理と向き合うことに誠実に取り組むことになるならば、我々が幼少期より心に刷り込まれていた先入観、偏見、俗説などから解き放たれ、何が真なのか改めて思索するようになるというのである。取り分け、幼少年期は、感覚的なもの、感情的なもの、感性的なもの、快楽的なものに意識が向かい、それらに映ずるものを全なりと判断してしまったりもするが、真は悟性の世界に、そして思惟の世界に存するというのである。幼少年期は、悟性や思惟は未成熟で、十全ではなかつたりもする。感覚的なもの、感情的なもの、そして感性的なものは、一時的なものであったり、刹那的なものであったり、仮初めのものであったりもする。永遠的なもの、普遍的なもの、そして持続的なものは、思惟の内に存在し、悟性でもって認識され、把握され得るものである。こうした思想もまた、ソクラテスやプラトンらが陳べた臆見(*doxa*)からの解放という考え方の系譜にあるのではなからうか。

---

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.32. 同上、91-92 頁参照。

『哲学原理』第一部、最終 76 節「我々は神的權威を我々の理知に優越させねばならず、そして我々は我々が強くはっきりと認識しないところのものを明示しはしないものを決して信じはしない」(Que nous devons préférer l'autorité divine à nos raisonnements, et ne rien croire de ce qui n'est pas révélé que nous ne le connaissions fort clairement)の記述は、次のようなものである。

「何よりも、我々が無謬の規則(règle infaillible)として保持するものは、神によって啓示されたことは他の一切よりも比類のないことであり、そして、もし反対に理性の閃き(étincelle de raison)が我々に何ものかを連想させることがあったとしても、我々はいつも自分たちの判断を神に由来するものに従わせたのであった。しかしながら、神学(théologie)が少しも関与してはいない真理(vérités)に関しては、自分が少しも真(vrai)であると認識したことのないことを真であると認めることは哲学者であろうとする人にとって相応しいことではない。ましてや正しく導かれて(bien conduire)成熟した状態に在るところの理性よりも感覚を、すなわち幼少期の無思慮な判断(jugements inconsidérés de son enfance)をより以上に信用することはなおのこと然りである。」<sup>9</sup>

神を至上として、理性の閃きを神の啓示に由来するものと考え、真理の探究は最上の学であるところの神学において為されるものとする思想は、デカルトが中世スコラ哲学の影響下にあることを示唆している文言であろう。プラトンのイデア、アリストテレスのエイドス、スコラにおける聖トマス=アクィナス(St. Thomas Aquinas, 1225?-1274)のフォルマなどは存在論の系譜であろうが、デカルトのコギト、すなわち〈思惟する我〉を中核とする認識論、唯心論はデカルト哲学をデカルト哲学足らしめている根本ではあるものの、デカルトも原則、古代中世哲学の文脈において思念していたと考えるべきであろう。

極論してしまうならば、〈我思う、故に我在り(je pense, donc je suis)cogito, ergo sum〉以外は、デカルトは古代中世哲学の枠内にあるとも言えるのではなからうか。

哲学者は、すなわち〈神を知る〉ということのもとより、理性によって正しく導かれた成熟した存在である。それは哲学者に限らず、思索の深奥さの程度の問題もあろうが、成年者にも妥当することであろう。従って、幼少年期の無思慮な判断であるところの先入観ないし偏見、臆見などに差配されてしまうことは、未成熟で稚拙ということになる。すなわち、感覚的なもの、感情的なもの、気分的なものに心が査配されてしまうことが然りということ

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.32. 同上、92-93 頁参照。



になるのである。或いは、深く考えていない、深く考えられないということでもなかろうか。

## 結語

本稿では、デカルトに基いて、我々が幼少期に獲得した先入観や偏見が、後年の人生においても如何なる影響力を有するか、それも取り分けても負の作用を及ぼすのかということについて考察した。本論考を通じて、我々の心に幼少期に刷り込まれた印象や想念は、成年となった後も、それを払拭すること、克服すること、擦り替えること、それから解放されることは如何に困難なのかということも実感させられた。

デカルトは、幼年期は心身が合一したものであると考えた、すなわち、身体こそ実在的なものであるとして、人を心ではなく、身体でもって見てしまうようになるのである。思惟の発達が充分ではないので、感覚による認識を真なりともしてしがいがちでもあろう。

幼年時代はまた、感覚と想像とを専らにしているので、事象というものを感覚的、想像的にしか素描できなかつたりもする。そして、快を好み、不快を嫌ったりもする。生理的習性として、人は本能的に心地良さを求め、心地悪さを避けるのではあるが、成年としての義務などが発生するようになった場合、そうした生理的欲求に終始することのみでは是とはされ得なくなる事情も出て来こよう。

我々が幼少期に持ってしまう先入観や偏見は、そうした感覚的なもの、感情的なもの、欲求的なもの、気分的なもの、すなわち非理知的なもの、非合理的なものに由来するのであろう。〈成年となる〉ということは、そうしたものから解脱し、〈理〉、〈知〉、〈良識〉という本質を把握する〈力〉を開眼させることなのではなかろうか。

しかしながら、そのようにして〈成年となる〉ことは容易なことではないのではなかろうか。『情念論』(*Les passions de l'âme*,1649)は、デカルトの死の前年の著作であることから、デカルトが終生、情念(*passion*)と向き合うことになることも、そうした問いを指し示しているようにも思われる。従って、これからもデカルト研究を継続する上では、情念の問題をその中核としていくことの必要性も実感させられた次第でもある。

## 註

原著作は、René Descartes,*Principorum Philosophiae*,1644.

仏訳は、l'Abbé Claude Picot, *Les principes de la philosophie*,1647;texte de

l'édition Alquié; la pagination de l'édition Adam&Tannery.を使用した。

邦訳としては、デカルト『哲学原理』桂寿一訳、岩波文庫、1964年、を参照した。

### [注記]

現著作を直接的に日本語に翻訳したものと、仏訳に基いて間接的に日本語に翻訳したものの間には若干なりとも差異が見られる。桂訳はラテン語原文に基づくもので、そのため仏語訳版と差異のある箇所は、本文中の至る所で注を設け、仏訳版の邦訳を提示されている。本稿での引用部分は、原則的に桂訳に基いてはいるが、仏訳版のみを参照しているため、ラテン語原文の桂訳と相違する箇所などは、仏訳版の邦訳、仏訳版の拙訳を試みて提示した。